

東京水産大(現東京海洋大)卒業、藤田観光(株)を定年退職。平成9年11月「二度とない人生だから」(蒼文社)出版。

「いつまでもときめいていたい *70歳が53歳の女性にアタック*」

60歳で会社を定年退職して10年が過ぎた。当初、平均寿命80歳までの20年間は、五体満足で人生をエンジョイすることを目標にした。そして10年経過した今、70歳。自分としてはほぼ満足のいく暮らしではあった。だが、ここ1~2年、どうしても埋め難い何かを感じるようになった。それよりは独り身の寂しさである。42歳で離婚して以来の長い独身生活。もちろん再婚を考えて付き合った女性はこれまで数名いた。ところが全部フラれてしまった。一番長く付き合った女性とは18年目にフラれた。(定年後結婚の約束)その時彼女60歳(定年)小生68歳。暫く女性不信に陥った。もうこの年で新たに女性を求めるのはとても無理だ。故郷の田舎に帰って、先祖の墓守りでもして余生を暮らすしかない。真剣にそう思った。

その頃、私は大手ショッピングセンターのグリーター(お客様案内係)をしていた。派遣会社から週二日の派遣勤務である。仕事柄館内の巡回もあった。ある日、洗面所に入ると清掃婦にはめずらしい若い女性(といっても50歳前後か)がテキパキと仕事をしていた。そんな光景を何度か目にしたある時思いきって声をかけた。「君、名前何ていうの」相手は悪びれもせず「萩原エリ子です」と答えた。フーム、素直だな。印象は悪くない。そしてまた数日後、思い切って尋ねた。「君、独身?」「ええ、そうよ」内心、ヤッター!こうなるともう自分のトシなんか念頭になくなり、巡回の度に彼女の居そうなトイレを探して?アタック、アタック、アタック。とうとうデートを約束するまでこぎつけた。

しかし結婚するまでそう簡単に事が運んだわけではない。その後、居酒屋で飲みながら、一泊の温泉旅行に誘った。ところが彼女はウンといわない。問い詰めると以前から付き合ってい

る彼氏がいるらしい。そりゃそうだ、これだけ魅力的な女が独りである筈はない。そこでこっちもファイトがわいてきた。負けてたまるか！だが一抹の不安がある。彼女の年齢は53歳。おいらとの年齢差は17歳。ウーン。だがこのチャンスを逃したらもはや永久に伴侶は現れないだろう。かくして精神状態は完全に昔の青年のそれと化した。それにしてもどこからこんなにエネルギーが出てくるのだろうか。詳細はスペースがないので割愛するが、とにかく今思うとガムシャラに突っ走ったのは確かである。後日、改めて最初の頃の僕の印象を妻に聞いてみると、こちらが声をかける以前に、「今度受付にロマンスグレーのスーツ姿のいい男が立っている」という噂？は知っていたとの事である。

そうこうするうちに、ショッピングセンターの仕事も70歳で終り、そうなると平塚のアパートから川崎に住んでいる彼女とデートするのが、距離的にも時間的にも無駄が多い。それである日、そのことを言うと、彼女いとも簡単に「それならウチに来たら」「エッ、いいの？」「エエ、いいわよ」その瞬間に、これで決まった、と思った。ライバルに勝った！という喜びもさることながら、これで正式に結婚して彼女を終生愛し続けられる、という嬉しさが、こみあげて来た。

一度は結婚は無縁と諦めていたのが、土壇場で敗者復活戦に勝ったという思いである。我々はそれぞれ子供が二人いる離婚経験者。孫は夫が3人、妻が1人。幸い親族はこの結婚に誰も反対しなかった。平成16年12月15日（水）大安吉日に、二人だけで川崎市宮前区役所に婚姻届を出した。因みに保証人は妻の母親と弟である。最後に、サムエル・ウルマンの詩（一部）を掲げて結びとしたい。“たとえ髪が白くなり、皮膚の皺が増そうとも、心みずみずしく、明日への情熱を失わなければ、青春は永遠なり”

*この小文は、後に続く団塊の皆さんに“二度とない人生”を全うして頂きたい贈りたい。